

兼好法師に挑戦国語 国語総合 普通科・第1学年
石川県立小松高等学校・教諭**1 事例の概要**

本校の生徒は高い理解力を持ち、しかも学習に対し前向きな態度を有している。国語に関しては、古典の予習率の高さがそれを如実に物語っている。ただし、読書習慣が身に付いていない生徒も散見され、基本的な語彙の欠如や、論理的に文章を読解する力の不足を感じさせることもしばしばある。

また、高校入学期の古典の授業は、ともすると訓古注釈的な文法や語彙の説明に終始し、断片的な知識の習得に汲々とする生徒も少なくない。ましてや知識と知識を連絡させ、それを結びつける活動は十分とは言えない。

「国語総合」という科目名が物語るとおり、知の総合化は国語科においても看過できない課題であると推察される。少なくとも、現代文と古典とそれぞれの学習の成果が少しでも連絡を持つ学習が求められてしかるべきであると考えた。また、「どのように書いてあるか」「書いてあるものをどう評価するか」という、PISA型読解力の育成に適った活動の必要性も感じた。

2 実践内容**(1) 単元の見どころ**

- ・古典の基本的な文法事項や語彙を習得する。
- ・現代文教材との共通点を考える。
- ・作者の論の組み立て方や例示の巧みさを理解する。
- ・効果的な具体例に基づいた意見文を書く。

(2) 指導上の工夫点**① 現代文との共通点を考えさせる工夫**

「国語総合」という科目名が示す方向性に従うならば、分野に拘らず総合的に生徒の言語活動がなされるような場面を設定する必要がある。今なお風化を見ずに評価の高い古典の文章と、現代文の教科書教材の共通点を考えさせることにより、古今を問わず説得力のある文章の特性を考えさせることがその試みとなる。

② 素材を創作させる工夫

例えば小論文を書こうとする時、ともすると高邁な意見を書こうとするあまり、筆が止まる生徒が見られる。主張そのものはありきたりなものであっても、それを導くための素材、具体例や体験、あるいは引用などの巧みが、文章を光らせることを理解させる。そのことを通じて書くことに対する抵抗感をなくす方略とする。

③ 作者の文章を評価する工夫

PISA型読解力のひとつに、文章を評価することが含まれている。ただ単に、教科書教材になるような文章を評価させても、ありきたりな評価になりがちである。自分や仲間の創作活動を通じて、その難しさを体感した後で評価することが、実感を伴った評価を生み出すものと判断される。

3 指導の実際

教科書 新訂国語総合現代文編・古典編（出版社名 第一学習社）

資料等 ワークシート、徒然草四十九段本文・口語訳 徒然草二百三十一段本文・口語訳

学習内容	生徒の学習活動	教師の指導・留意点	評価規準
現代文評論『街角のエコロジー』の構造理解（既習の単元）	筆者の主張がどのように導かれているかを考える。	既習の教材を例にし、具体例から主張が展開されていることを確認する。	筆者の主張がどのように導かれているか理解している。
徒然草第九十二段の主題の把握と構造理解	前後二段の関係を考え、例示の効果を考える。	現代文の評論の構造と比較させる。	現代文との共通点の気づきを通して、例示の効果を考えようとしている。
徒然草第九十二段・徒然草二百三十一段の具体例の創作	筆者の主張を導けるような具体例を創作する。	どのような具体例を創作したか、生徒に発表させる。	筆者の主張を導く、具体例を創作している。
兼好法師の文章に対する評価	自分や他者の創作と、兼好法師のものとを比較し評価する。	兼好法師の例示や論の展開について、自由に意見を述べさせる。	兼好法師の文章について評価している。
意見文作成	具体例と主張からなる意見文を作成する。	具体例に工夫を凝らすように指示する。	主張に結びつく効果的な具体例を考えようとしている。

C-1 指導案

C-2 ワークシート

C-3 参考資料

C-4 生徒の創作例（1）（2）

4 成果と課題

(1) 成果

- ① 自分で具体例を創作したり、他者の発表を聞いたりすることを通じて、改めて作者の着眼点の素晴らしさに気づく生徒も多かった。また、例示の重要さに気づく生徒も多くなってきた。
- ② この実践を通じて、現代文においても、具体から抽象への論の展開について意識するようになったと思われる。少しずつではあるが、文章を全体として捉え、それぞれの部分がどのようなはたらきを持っているかを考える生徒が増えた。
- ③ 生徒自身の創作という比較対象があることで、作者の文章に対する評価も比較的容易に行われたようである。その後、生徒の意見が賛否両論にわかれる題材で評価活動をさせたが、その際にも、ほとんどの生徒が自分の意見を躊躇なく書いていた。

(2) 課題

- ① 今回の生徒の創作を見る限り、予想以上に同質のものが多く、ステレオタイプという言葉を意識せざるを得なかった。今回扱った教材では、多様な反応を期待するには若干の無理があったようである。生徒のより多様な答えを導き出せるような題材がふさわしかったと思われる。
- ② 生徒の成果物に対する評価の工夫が必要である。多様な答えを導き出した上で、生徒同士に相互評価させる時間などがあると、より一層充実した活動になると思われる。
- ③ より効果的な具体例があげられるかどうかは、いかにより注意深く日常を送り、自分の目で見ているかの裏返しでもある。そのような基本的な態度の育成を、国語という教科を通じて継続的に行うことを研究する必要がある。

